

生前の菊地浩さん(左)と妻のアガフィアさん。優しい夫だったという＝撮影日不明（菊地さんの遺族提供）



1 953年7月、26歳の菊地浩さんが根室海峡を漂流後に旧ソ連当局に連行されたのは国後島古釜布だった。北方四島は既に旧ソ連が実効支配し、日本と国交はない。菊地さんが生前に書き残して遺族が昨年自費出版した自叙伝「ソ連人になった日本人の物語 霧のヴェールの彼方」（新風書房）は、流ちょうな日本語を操るオルロフ大尉がスパイ容疑で尋問する場面を記している。

「あなたの姓名、生年月日、履

2 国彷徨

ソ連人になった日本人の物語 ②

歴を詳しく話さない」。終戦までは簡単に説明できた。が、終戦後に家を出て納沙布岬から小舟でこぎ出すまでの8年間の放浪記をどう説明できるか。

大尉「おとぎ話はやめにして、これからは本当のことを話さない。誰からどういう任務を受けてソ連に来たのですか？」

菊地さん「あなたの言うおとぎ話が私の履歴です。私は死ぬ気で海に出てソ連に助けられた。だからどうなってもかまわない。スパイならスパイで処刑したらいいじゃないですか」

その夏、太平洋を隔てたキューバではカストロ氏が、後の社会主義革命につながる武装蜂起を行っていた。「世界が新旧の思想対立が生んだ必然的な胎動を予感していた時、自分自身の無気力さから自由社会の舷外へ落ちた私」。菊地さんは孤独の水底にいた。

9月、菊地さんはサハリンのコルサコフ、さらにユジノサハリンスクに移され、独房で約9カ月間、取り調べを受けた。スパイ容疑は晴れたが、不法に入国した「越境罪」でシベリアのイルクーツクのラーゲリ（強制収容所）へ。軍用衣類の修理が主な仕事だった。

仕事が終わると、若い画家から油絵を習ったり、たばこ入れに花模様を彫ったりした。日曜日には、

連行、収容…安寧の地へ

外出用の衣類を身に付け、映画や観劇に行くこともできた。

その後釈放され、シベリアに抑留された日本人の元に一時身を寄せるなど、あてのない放浪生活を続けた。根室を離れてから3年後の56年7月、黒海に面した現ウクライナ・オデッサの小麦粉工場に就職し、ロシア人女性のアガフィアさんと結婚。娘が生まれ、旧ソ連の国籍も取得した。

「よく和だこを作って近所の子供と飛ばしたり、日本文化を伝えようとしていた。話がおもしろくて、自慢の父親だった」。菊地さんの娘でオデッサ在住のエカテリーナさん（52）は振り返る。職場では時間や約束を必ず守る勤勉な働きぶりが信頼され、人望も厚かったという。

菊地さんは88年、61歳でがんで亡くなった。自叙伝はオデッサに向かうところで終わっているが、エカテリーナさんの元には菊地さんが晩年、本の続編を書くために書きためた3冊の日記や新聞記事などの資料が多く残されている。

菊地さんは学費や医療費が無料だった当時の旧ソ連の共産主義を理想的なモデルと感じていたといい、「日本人に、もっとソ連を知ってもらいたかったんだと思う」とエカテリーナさん。ただ、病に倒れ、執筆はかなわなかった。